

## きのこ・かび 関連図書の紹介

吹春 俊光

2012年に出版された、きのこ・菌類関連の本をご紹介します。  
幸いです。だいたい出版順。

### 「キノコの教え」

著者：小川 眞，出版社：岩波書店，2012年4月21日発行，  
240頁，ISBN：978-4-00-4313656-6，800円（＋税）

私が学生の頃（1970年代から80年代にかけて）、当時在籍していた大学のなかでも菌根を専門に研究する人は、教官にも学生にも一人もいない、とっていい状況だった。きのこ屋さんも学内に1名だけ。もちろん菌類や菌根の情報はとてもすくなく、小川先生が書かれたものは、とても貴重な情報源だった。「菌を通して森をみる」という主張は、そんな時代からの小川先生の主張であり、先進的で斬新な視点だった。そして現在、菌類や菌根の研究者や大学の講座は、当時と比較すれば相当に増えているのはご存じのとおり。

本書の前書きで、小川先生は次のように述べておられる。「現在のように自然破壊が進み、環境汚染が広がり、気候変動が激しい時代になると、自然界の仕組みを正しくとらえ、その大きな変化に誤りなく対応する必要がある。そのためには、生物界の中で重要な役割を果たしている菌類についても、よく知ってもらう必要がある。日ごろ気にしていることを、キノコに成り代わって書いてみることにした」。いつもは、専門書をあつかうような出版社で活動されてきた先生だが、今回は岩波新書であり、日頃きのこ縁がなさそうな人々にも、きのこ暮らしぶりを知ってもらうよい機会である。

最初の1章はきのこの生物学である。2章は食欲の対象としてのきのこのことが書いてあるが、東電の事故により、今回環境中に大量に放出された放射性物質に関わる話題も13頁にわたってふれてある。3章はきのこの増産や栽培の話題なのだが、もともと先生は外生菌根菌の専門家なので、トリュフ・マツタケのところでは、これまであまり知られてこ



なかったような先人の苦勞話なども盛り込まれている。菌床栽培事始めなどの情報もある。

そして、きのこのことを知らなかった人たちに本当によんで欲しいところが、4章「腐らせること」、5章「森を支えるキノコ」、6章「環境異変を告げるキノコ」のところである。そして7章「マツを助けたショウロ」は、炭ときのこを携え白砂青松マツ林再生全国行脚翁としての小川先生のお話である。今回の震災による津波で被害をうけた東北の海岸マツ林のことにも多くの紙面をさいてある。海岸林が流されてしまった宮城県名取の海岸に残ったマツをみて「かわいそうなので、根を掘るのは遠慮したが、葉の色や長さ、小枝の出方から見て、間違いなくショウロがついている」という言葉もある。なんとという達人。

「マツを植えるという行いは、売名や利益追求のためになすべきものではない。これは未来のために尽くす無償の奉仕にはかならない。昔の人たちのように自然に寄り添って、心豊かに気長に実践すべき行いなのである」。きのこをよく知る立場にいるわれわれは、きのこを通して日本の林や森のことをもっとよく考え、地球におけるきのこの重要な役割をふまえたうえで、きのこについて、なんらかのかたちで情報発信してかなければならない。本書は広く世間の人々に、繰り返し読んで欲しい本である。

## 「海岸林再生マニュアル—炭と菌根を使ったマツの育苗・植林・管理」

著者：小川眞・伊藤武・来栖敏裕，出版社：築地書館，2012年11月15日発行，74頁，ISBN：978-4-8067-1451-4，1000円（＋税）

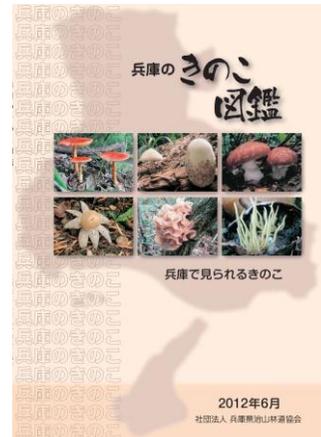
筆者らは、人為によってひきおこされた環境変動により、日本をはじめ世界中でおきている樹木の枯死現象を憂い2006年4月に「白砂青松再生の会」をたちあげた。そして生涯の学問とその実践の中で得た知識と知恵を森林再生に役立てたいと、菌根の役割を加えて育苗から植栽・管理までの方法をまとめたのが本書である。菌根菌の接種のための孢子液の作り方、種まきの実際、下刈り、間伐の方法などが技術として述べられている。実践のためのマニュアル本である。前書によれば、禪宗に「栽松の行」というのがあるそうで、木を植えて育てることは禪の修行のひとつとなるという。前書とあわせて座右にそなえ、東や西に枯れそうな森や林のことを聞けば、本書を携え実践にでかけなければならない。



## 「兵庫のきのこ図鑑」

著者：藤堂千景・正井俊郎・山田裕司，発行：社団法人 兵庫県治山林道協会，2012年6月発行，58頁，非売品。

本書は「兵庫の林業」に2005年から2012年まで7年間、28回にわたって連載されたものが元になったものだという。千葉県にすむわれわれは、兵庫県がどこにあるかもよく知らないが、立派な照葉樹林から千葉県にはみられない立派なブナ林も兵庫県にはあり、きのこの種類は豊富な県である。本書には、あまりなじみのないニオイドクツルタケ、オオオニテングタケ、ヨソオイツルタケ、ハイイロオニタケ、コトヒラシロテングタケ、アカツムタケ、アルカリキゾメニガイグチ、フモトニガイグチ、クサイロハツなどが写真入り掲載されているのも特色のひとつだが、最大の特色は、本書全頁がフルカラーpdf でダウンロードできることである。関心のある方は「兵庫のきのこ図鑑」で検索してみてください。



## 「カビのふしぎ 調べよう」

著者：伊沢尚子，監修・写真：細矢剛，出版社：汐文社，2012年9月発行，59頁，ISBN：978-4-8113-8890-8，判型：26.4 x 21.8 cm，3300円（+税）

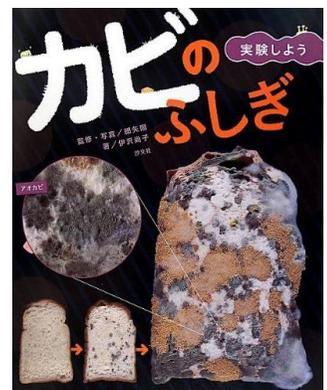
監修者は、あの椿啓介先生の最後の弟子で、長年製薬会社でかび関係の研究・製品開発などに従事し、その後、国立科学博物館の菌類担当となり、2008年に菌類展を企画した人である。とにかく、よくできる人が背後にいるので、よくできた本となっている。構成は3段階になっており、最初の部分は、イチゴにはえたカビの正体を調べる導入部。そして、食品をつくるカビや医薬品をつくるカビを紹介し、最後に、腐生・寄生・共生の暮らしぶりを知る、というつくりになっている。ハードカバーで耐久力もありそうだが、やや高価なので、図書館向きかもしれない。学校とかに備えてあるとうれしいかも。



## 「カビのふしぎ 実験しよう」

著者：伊沢尚子，監修・写真：細矢剛，出版社：汐文社，2012年7月25日発行，59頁，ISBN：978-4-8113-8889-2，判型：26.4 x 21.8 cm，3300円（+税）

前書の姉妹版。本書は実験編で、4つの章にわけてカビの実験をそそのかす本。第一段階は「カビをつかまえる」。モチやミカンをつかってカビを発生させる実験。第二段階は「野外でカビをさがす」。水の中から、あるいは土壌からカビを「釣る」、糞のカビやきのこを「待つ」、そして生えてきたカビを観察する。そして第三段階は「店でカビを



買う」。第四段階は「カビを植える」。ここまでくると、もう大学の卒論と同じレベル。平易に書いてあるようにみえて、内容はとっても高度。同じシリーズで「カビのふしぎ調べよう」という姉妹版もでています。2冊買うとちょっと高いので、近所の図書館にお願いする、というのもいいかもしれません。

### 「乾しいたけ—千年の歴史をひもとく」

著者：小川武廣，出版社：女子栄養大学出版部，2012年7月30日発行，205頁，ISBN：978-4-7895-5451-0，2000円（+税）

雑誌「特産情報」に連載された記事に加筆修正されたものだというが、巻末の資料も含めて、乾シイタケについての歴史・生産・流通・消費を含めた、現時点での総合的な情報がまとめられており、乾シイタケ資料の決定版ともいえるべき著作である。巻末の20頁以上にまとめられた、道元からはじまり東電の原発事故でおわる千年におよぶ乾シイタケの年表も圧巻である。

著者は林野庁を経て、昭和53年から平成23年まで日本椎茸農業協同組合連合会、またその会長をつとめた方である。その時期はちょうど中国からの輸出がふえはじめた時期に重なっている。世紀に中国から乾シイタケの食文化が入ってきて以来の乾シイタケにかかわる全ての歴史をひもとき、日本のシイタケ産業の行く末を案じる著書となっている。私は門外漢であるが、なにしろシイタケの話題なので、関心のあるひとは持っていて損はしない本である。



### 「きのこの不思議—きのこの生態・進化・生きる環境」

著者：保坂 健太郎，出版社：誠文堂新光社（子供の科学★サイエンスブックス），2012年8月31日発行，96頁，ISBN：978-4-416-21258-5，2200円（+税）

タイトルは子供の本だが、大人が読んで面白。私は真剣に読んでしまった。全体は10章にわけられており、7章までが、きのこ学入門、そのあとの3章が、きのこ研究の面白さを伝える部分となっている。きのこ学入門のところにも、2章「きのこの不思議な形の秘密」で、地下生菌になったきのこ類についての深い考察が披露されていたり、きのこの派手な色や発光についても、独自の前向きな意見がのべられたりして、子供でなくてもわくわくする。3章「太古のきのこの秘密」でも、分子時計、謎の化石プロトタキシテス、琥珀化石などが正面から紹介されており、著者と一緒に菌類の進化を推理していくような気持ちにさせる。



後半部分で特に面白かったところは8章「きのこ博士の研究」。若い著者がこれまで、きのこの進化と不思議をたずねて旅したハワイ、ニューカレドニア、ニュージーランド、カメルーンなどの調査の様子が、興味津々で20頁にわたり紹介されている。子供の夢をかきたてる内容である。最後は「もっと行きたいところ」の南極で締めくくられており、ここまで読むと著者と一緒に調査に行きたくなる。

著者は1976年生まれ。日本の大学を卒業したあと米国のオレゴン州立大学で博士号を取得、シカゴのフィールド博物館で研鑽をつんだあと、2008年から国立科学博物館の職員となった。ほんとうによいひとが日本のナショナルミュージアムの菌類担当になってくれたものだと、心から思うような出来の本となっている。

きのこの秘密を旅することは、われわれとも無縁ではない。きのこの不思議を考えるひとときを与えてくれる本なので、是非、手にとってください。

### 「石狩砂丘と砂浜のきのこ」

著者：竹橋誠司・星野保・糟谷大河，出版社：NPO 法人北方菌類フォーラム，2012年9月7日発行，216頁，ISBN：978-4-990510-0-1，B5判，5,500円（税込，佐野書店のウェブサイト掲載の価格）

労作である。前書きのところに、「窓越しに見える日本海」とあり、竹橋さんの住所を検索してみると、石狩湾がすぐそこであることがわかる。竹橋さんは、今自分が真剣に暮らしている生き物をとおして、故郷の自然を見直してみると、どうなるか、ということを実践されたのかもしれない。そこには、竹橋青年、いや子供のような竹橋さんの視線を感じてしまう。子供のころ見た自然を、今、きのこを通して見直してみているのだ。幸せな作業である。掲載されている種類は27属68種であるという。未知種や未同定種も多いようだが、かまうものか、というかんじで、どんどん記載されている。きのこのことがよくわかるように、もちろんフルカラーだ。顕微鏡図もすべて掲載されている。種名を調べる途上で比較した標本も、好きな内容もどんどんのせる。コラムも多い。未知種として掲載されている種類の図をみると、たとえば、37頁のヒトヨタケ類は柄が長く、なんだか不思議な形状をしている。これはいったいなんだろうかと興味津々である。そんな種類も掲載されており、本をながめていくと、つつい真剣に読んでしまう。そんな本です。著者の竹橋さんは1944年生まれと書いて

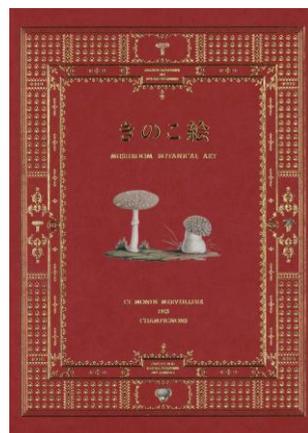


あるので、もう結構なお年なのですが、若々しい情熱を感じさせる本となっています。

### 「きのこ絵」

編集：関田理恵，出版社：パイ インターナショナル，2012年9月9日発行，240頁，ISBN：978-4-7562-4258-7，判型：21.2 x 15 cm，2200円（+税）

INAX ギャラリーの2008～2009年の展示会「考えるきのこ」のとき、千葉県立中央博物館所蔵の和洋稀覯本が展示図録に紹介された。これらの本は展示用ということで、景気がよかった時代に千葉県の博物館で毎年こつこつと収集し、それが一財産になっていたのである。理由はともあれ、あつめられた18～19世紀につくられた西洋の図鑑に掲載された、リトグラフやエンブレイグによるきのこ絵の図版は、見るたびにおもうが、本当に美しい。また江戸時代末期の日本のきのこ図鑑（本草図譜）のデザインも、見てびっくりの驚くべき出来である。それらの図を目にした編集者により、それらの図の見事さを伝えようとして本書はつくられた。ほとんどの図版は、千葉県立中央博物館により収集され所蔵されているものである。やはり印刷では、本当の図版のすごさは表現できないけど、本書を開いてみると、やはり印刷でも相当に美しい。私の駄文も2頁だけ掲載されていますので、是非、手にとってみてください。



### 「ときめくきのこ図鑑」

著者：堀博美（文）・梶井亮（写真），出版社：山と溪谷社，2012年10月5日発行，127頁，ISBN：978-4-635-20223-7，判型：20.8 x 14.8 cm，2200円（+税）

掲載されている写真は、典型的ではないものや未熟ではとおもわれるきのこを対象にしたものも多く、背景も壮大にぼけた深度が浅い写真が並んでいる。鮮明なきのこ写真じゃないとだめなきのこ好きにとっては、ちょっとアレな本である。解説テキストの情報量も少なく、書いてある内容も、そんなことは・・・と思うような、いわば「役にたかない」解説が並んでいる。そして「図鑑」と銘打ちながら、きのこを調べる図鑑としては使えそうにもない。すなわち、典型的な図鑑に慣れた目には、かなり不可思議な本となっている。でも増刷を重ねているらしく、ぜんぜん売れないきのこ本の中ではかなり売れているらしい。いきなり買うと、冒頭のような感想になる人も多いかと思うので、まずは本屋さんで立ち読みしてみてください。

